

教観を論じた。彼が有史以来の真の教えの存続を認める限りに於いて、真理のセクトは歴史の初めから、マニ自身の誕生とは別に存在していなければならない。この真の教えは誤謬のセクトによる虚偽の付加により隠されているとされる。パラクレイトスたるマニの教えは、このように混交した虚偽と真理とを判別する事にある。従つてファウストウスは聖書を読み解く際の真理の基準を提供する権威としてマニを立てると言えよう。しかしその一方で彼は、キリストの教えとマニの教えの調和を示そうと、こうしたマニの権威を聖書に基づいて立証しようとしている。事実、ファウストウスによるマニへの言及はほぼ皆無といつて良く、四世紀には既に属州アフリカで受容されていたマニの書簡「基本書」に見られるマニの神話を引用することもない。

この「基本書」においてマニの神話はキリスト教に対するマニ教の優位性を示す役割を負っている。しかしまた聖書と最も鋭く対立するのが、このマニの神話であった。ファウストウスは三つの律法の概念と真理のセクトの概念を導入することにより、キリスト教思想とマニ教思想を一致させようと試みるのである、この試みは一定程度成功していると言えよう。しかし他方でその神話体系を後退させることにより、マニ教をカトリックから区別する為の示差性を提示するという点では課題を残したと言える。

以上の議論から我々は、真理のセクトの概念の導入とそれに伴うマニの役割の縮小が、当地のマニ教の異端化の一因になったと結論づけるものである。

メソポタミアの「呪術師」

渡辺 和子

宗教学のなかでメソポタミア宗教はまだ本格的に論じられていない。遠い過去の宗教について論じることが概して難しいが、メソポタミア宗教の場合にはいくつかの特別な事情がある。一つは、粘土板文書（およそ紀元前三〇〇〇年頃から紀元前五〇〇年頃のもの）に書かれた楔形文字（主にアッカド語）の解説がなされ、メソポタミアの「宗教文書」が世に知られるようになったのが一九世紀後半以降であったため、同じ頃から開始された「近代宗教学」の視野のなかにメソポタミア宗教はほとんど入らなかったこと。もう一つは、西欧のアッシリア学者（楔形文字文献学者）によつて聖書、キリスト教、そして西欧近代文明のフィルターを通してメソポタミアの「宗教文書」が論じ始められ、その影響が現在でも完全には払拭されていないことである。さらには、文書が主に粘土板に書かれたという特殊事情がある。粘土板文書は自然乾燥だけで必要十分な耐久性をもち、すべて作成時には焼かれていないことが最近になってわかってきた。耐久性をもつ石や金属に刻まれた文書もあるが、高価であるため割合は少ない。発見される文書の多くは、主に政治的抗争のなかで火がかけられたときに適度に焼けて残存し、後代の発掘などによつて出土するものである。火災は粘土板文書にとつてある種のタイムカプセルの役割を果たすが、それはせいぜい火災以前の数十年の時間を閉じ込めるものでし

第14部会

かない。平穩な暮らしが続く場合には、不要な文書はその都度廃棄されてゆくのであり、また火災によるタイムカプセルも出現しない。焼かれていない粘土板文書は水分に弱く、現在まで残存する率は低い。現時点での文書の数という観点から整理をすると、これまでの一五〇年間に十数万点の文書が公刊されたが、約二倍の文書が博物館などで今後の公刊を待っている。今後発見される文書はさらに多い。しかしほぼ無限に多いのは、すでに失われた文書の数である。

二〇世紀半ばにはアッシリア学者たちによって文書の「実証的」な研究が目指されるようになり、本格的なアッカド語辞書の編纂が開始された。そのころA・L・オッペンハイム（一九六四年）が、「西洋人」にとってメソポタミア宗教は理解できないし、理解したいとも思えないと吐露したことは、西欧文明の「呪縛」のなかではメソポタミア宗教を論じられないことの宣言であつたとみることができ。しかし今日では西欧アッシリア学でも「呪縛からの解放」が進み、「宗教文書」の研究が盛んになってきた。

古代宗教研究では入手可能な資料の偏りのほかに、インフオーマントや実際の儀礼が欠けていることが痛手となる。しかし発表者は、さまざまな地域、特に日本の民俗宗教との比較研究によって、西欧アッシリア学の限界を超えるメソポタミア宗教の研究法を見出し得ると考える。たとえば欧米の辞書で「呪術（師）」「呪文」「邪術（師）」などとされてきたものの再検討には、原文の精査だけでなく、豊富な情報と資料をもつ様々な民俗宗教との比較が有益である。近年の研究によってメソポタミ

アの主要な宗教的職能者であるアーシップ（辞書では「悪魔払い師」）は、多様な職種の人々を擁する集団を形成して神殿に属し、さまざまな「唱えごと」（シプトウ、辞書では「呪文」と儀礼行為を組み合わせて浄化、除災、病氣治療、神像の制作と修復儀礼などを行っていたことがわかってきた。「マクルー」とよばれるアーシップの文書のなかでは、いわゆる「邪術」（キシュブ、イプシユなど）の被害を訴える人が、その犯人としての様々な種類の「邪術師」（カッシャープ、エーピシユ、サーヒルなど）にそれぞれの「邪術」を返すことをアーシップに依頼している。このような宗教文書を日本語に訳すためには、日本における対応物とその背景を比較考察することが必要となる。またそれによってメソポタミア宗教の新たな理解も可能になってゆく。

戦間期ハワイ日系宗教と

二つのナシヨナリズム

高橋典史

近代以降、日本の領土拡張や海外移民の増加という流れのなかで、日本にルーツをもつ多くの宗教集団が、海外地域においてさまざまな活動を行ってきた。そのなかでも、「日本」というナシヨナルな領域を越境した集団にとっては、日本と移動先の二つの国家への対応が必要であつた。そうした集団もまた、近代日本における「宗教とナシヨナリズム」の一側面である